

○*Yunnanea* (ツバキ科) について (津山 尚) Takasi TUYAMA: On genus *Yunnanea* Hu (Theaceae)

Yunnanea xylocarpa Hu は胡先驕博士によって発表された 1 属 1 種の植物で、雲南省の一地点に産することが報告された。この文献は植物分類学報 5: 282, pl. 55, 1956 であり、図版 55 は本文中に 図 1. として少し縮小して紹介した。この文献は R. H. S. *Rhododendron and Camellia Year Book 1957*: 105, 1957 に中国文の部分を除いて再出版されている。

その後、J. R. Sealy 博士の A revision of the genus *Camellia*, 1958 の中で *Camellia* の近縁属の一つとして言及されている。Sealy 博士は標本は見えていないが、この属について胡博士と手紙を交換している。

最近中山大学の張宏達教授は *Camellia xylocarpa* (Hu) Chang の新組合わせを山茶属植物的系統研究 (中山大學学報 自然科学論叢 1: 71, Fig. 12, 1981) に発表した。即ち *Yunnanea* は *Camellia* の異名とされたのである。この処置は妥当であり、筆者も賛成である。ただし張教授は *Yunnanea* がどの点で独立属としての価値がないかを具体的に論じてはいない。筆者はこの点を述べてみる。

Yunnanea に関する文献は少なく、気がついた所では Willis, Flowering plants and ferns ed. 7 (Airy Shaw) 1966 に *Yunnanea* Hu = ? *Camellia* L. とその独立性に疑問を呈しているのがある。

花柄に関して 胡博士の属および種の記載を通じて一番目立つことは、花に長さ 1 cm の細長な裸の (萼苞に包まれていない) 花柄があることである。このことは図版と矛盾する。Sealy 博士はこの件に関して胡博士に手紙を書いて質問した。胡博士は花柄は折れて失われてしまい、画家が果実に残存した萼苞と落下した花冠とで取りつくり書いたものであることを認めた。事実、*Yunnanea* の原記載には子房は不明となっていて、花の標本は完全なものではなかったことを示している。張教授はこの点に何も触れていなくて、無視している。

果実の裂開について Sealy 博士によると、Hu 博士が果実は definitely indehiscent としているという。これは胡博士のふくみのある記載を一方的に強調しすぎているのである。胡博士の記述によると「一個の果実が基部で厚い果皮が少し開裂していた。しかし、厚い木質の果皮が最終的に開裂して全開することには疑問がある (意訳)」である。絶対に開裂しないというのではないのである。胡博士は勿論 type 標本に含まれる果実は成熟したものとしている (fructus maturus...)。

胡博士の type 標本に関する記載は次のようである。「雲南、順寧県、雪山、高 2,400 米、生森林中、喬木高約 6.5 米、花紅色、果木質、暗褐色、常見、愈徳浚 16021 号 (模式標本)、1938 年 5 月 27 日。」

張教授の同一の type 標本に関する記載は次のようである。「雲南：風慶 (順寧)、海

雲南茶 *Yunnanea xylocarpa* Hu

1. 花枝 (×1) 2. 花冠, 展开, 表示5花瓣及1附加花瓣与雄蕊 (×1) 3. 雄蕊 (×3)
4. 幼果横切, 表示3室 (×1) 5. 果 (×1) 6. 果的横切 (×1) 7. 种子 (×3)

図1. 植物分類学报 5: pl. 55 (1956), 少し縮小.

拔2400米, 小喬木, 高6米, 花紅, 1938年5月27日愈徳凌 16021 (模式)。」風慶は多分鳳慶の誤植ではないかと思われる。両者の簡体字は非常に似ている。胡博士が「常見」と云っているように原産地附近では普通であるのにも関わらず、標本はただ一枚であった。Sealy 博士も「...is known from only one collecting」としている。鳳慶は下関の南方 120 km, サルウィン, メコン両河の中間にあり *Camellia pitardi* C. Stuart

var. *yunnanica* Sealy の既知の分布域をわずかに南方にそれている。

張教授によると花は2-3月に開き、果実は5月になお未成熟としている。同教授は type 標本の花を末期のものとして開花期を推定したものらしい。

一般に *Camellia* の野生種の花は年末から春、または春季に開き果実は夏に熟して裂開する。筆者の考えは、type の果実は張教授のいうように未成熟のものではなく、また胡博士のように成熟したものでなくても、古い果実である。ツバキ属の果実は成熟の途中で落下することがある。これは地上で乾固して翌年の開花時にまだ腐らずに採集されることがある。こういう果実ではしばしば果実の基部に短いたての割目を生じていることがある。上記の訳文による胡博士の記載「基部で厚い果皮が少し開裂していた」はこのような状態とよく一致する。*Camellia* の果実が先端からではなくて基部から割れはじめることは考えられないから、筆者の推定の方が正しいと思う。要するに *Yunnanea* も成熟した果実は開裂しないという根拠はないのである。

種子について 胡博士は *Yunnanea* の種子は *subtrigona* としている。Sealy 博士は側方から扁平されている (*laterally compressed*) とする。またその点で *Pyrenaria* や *Tutcheria* と似ているとする。ツバキ属の種子は扁平されず、球状またはそれが互に圧されて稜状の角を作ったりするので、*Yunnanea* の種子の図はまだ少し若い状態であるがツバキそのものである。Sealy 博士の記載は何かの誤認と思われる。張教授は種子については何も云っていない。

花糸について 胡博士は雄蕊の花糸に小疣状の突起があるとしているが、これは筆者の *Camellia* の他の種の経験から病的なものと思われる。

以上を通じて見ると *Yunnanea* を *Camellia* と属を別にする 何の理由もないことになる。

The genus *Yunnanea* Hu was published by Prof. Hu Hsen Hsu in 1956 (*Act. Phytotax. Sin.* 5: 282) as a monotypic genus including one species *Y. xylocarpa* Hu from Yunnan Prov., China. The description was accompanied by a plate (Refer to Fig. 1 in the present note). The type specimen, Fengqing, Shunning Hsien, alt. 2400 m, no. 16021, 27 May, 1938 consisted of material in fruit and a detached corolla.

According to Prof. Hu, the new genus is undoubtedly closely related to the genus *Camellia*, but quite different in having the naked pedicel and the indehiscent fruit. Concerning the discrepancy of the original description and the accompanying plate, Dr. J.R. Sealy was informed by letter from Prof. Hu that the naked pedicel of the type was broken off and lost. Dr. Sealy without examining the type specimen, pointed out that the seed of *Yunnanea* is laterally compressed, and finally accepted *Yunnanea* as a separate genus (A revision of the genus

Camellia, p. 7, 8 et 12, 1958).

Recently Prof. Chang Hung Ta treated *Yunnanea* as a synonym of *Camellia*, and thus proposed a new combination, *C. xylocarpa* (Hu) Chang (Jour. Sun Yatsen Univ. Nat. Hist. 1: 12 et 71, 1981). The writer is of the same opinion as of Prof. Chang, but he did not further discussed the nature of *Yunnanea*. Prof. Chang seems to be of opinion that the naked pedicel and the indehiscent (i. e. do not dehisce into distinct valves) fruit can not be tenable. Prof. Chang says that the fruit of the type specimen which is collected on 27 May is still immature. In the writer's view, the fruit of the type specimen is dropped immaturity and dried one of the preceding year. Prof. Hu says 'In one fruit it is found that at base the thick exocarp slightly dehisced.' This condition seems to suggest in favour of the writer's view. Concerning the seed of *Yunnanea*, Prof. Hu says 'oblonga exaltata' and 'subtrigona.' The plate also suggests that the seed is rounded wedge-shaped; the fact commonly seen in *Camellia*.

(東京都文京区 ██████████)

□50年を迎えた野外植物研究会の「野草」 Fifty years' memorial number of "Yaso", bulletin of a plant-lovers' club in Tokyo 植物を愛し趣味として植物を研究する仲間で作っている同好会・友の会・研究会などの団体は、東京や近傍に意外と多く、それぞれ独自のやり方で楽しく活動している。30年以上続いている会もたくさんあり、たとえば牧野植物同好会は東京植物同好会時代を含めると73年、横浜植物会は今よりすぐ75年になる。それらと比較すれば今年で50年の野外植物研究会は永年継続という点では格別なことではないというもの、機関誌の「野草」が発会と同時に創刊されて以来今年1月50巻397号となるまで連続として発行が続いていることは特筆すべきことである。この会誌によって会員相互の知識の交換に役立たせると1巻1号の巻頭に書かれているが、内容は会員の観察結果の報告や指導者の啓蒙的記事、特に身近かな植物を材料にしたものが多く、専門家でも教えられ興味深いと感じるものが多かった。しかし虚勢を張った論文や文芸風ものは全く見当たらない。創刊以来最も活躍されたのは故松山庫三氏と現在の主幹牧野晩成氏で、両氏の努力によって刊行が続き内容が保たれたと考えられるが、熱心な会員の協力もまた大きかったようである。この会誌発行のほかに採集会（現在では観察会）や座談会などの行事が頻繁に開かれたのは言うまでもない。

(伊藤 洋 Hiroshi Ito)